



安曇野市の埋蔵文化財第13集

新林遺跡 3

立体駐車場建設に伴う第3次発掘調査報告書

2017. 3

安曇野市教育委員会



安曇野市の埋蔵文化財第13集

新林遺跡 3

立体駐車場建設に伴う第3次発掘調査報告書

2017. 3

安曇野市教育委員会

表紙写真 新林遺跡SB1 出土縄文土器

裏表紙写真 新林遺跡第3次発掘調査区遠景（南東から）



SB1敷石（南西から）



出土石器



兩耳壺形土器出土狀況



SB 1 出土兩耳壺形土器

序

埋蔵文化財は、安曇野市の歴史を理解するためにかけがえない市民共有の財産です。安曇野市教育委員会では、埋蔵文化財の発掘調査等を通じて、地域の歴史資料の蓄積及び調査結果の公開普及に努めています。

本書では、新林遺跡第3次発掘調査の成果をまとめました。新林遺跡は、北アルプス山麓から東流する川窪沢川の右岸に広がる、縄文時代の集落跡です。これまでの発掘調査によって、この遺跡では縄文時代中期後半に大規模な集落が存在したことがわかっています。縄文時代の人々は、新林遺跡周辺の森林や河川がもたらす豊かな恵み享受着、集落を営んでいたであろうことが想像できます。今回の発掘調査では、縄文時代中期最終末の敷石住居跡が確認され、縄文土器や石器も出土しました。この調査によって、北アルプス山麓の縄文時代の人々の生活がまたひとつ明らかになったといえます。

末筆となりますが、本書をまとめるにあたり、株式会社ハーモニック・ドライブ・システムズをはじめ、多くの皆様、諸機関にご協力とご指導を賜りました。この場をかりて、厚く御礼申し上げます。

本書掲載の調査成果が多くの市民に活用され、広く安曇野の歴史・文化解明に役立つことを祈念し序とさせていただきます。

平成29年（2017）3月

安曇野市教育委員会
教育長 橋渡 勝也

例 言

- 1 本書は、長野県安曇野市に所在する新林遺跡第3次発掘調査の報告書である。
- 2 本書掲載の調査は、安曇野市教育委員会が実施し、株式会社ハーモニック・ドライブ・システムズが費用負担した。
- 3 本書の編集は、安曇野市教育委員会教育部文化課が行った。執筆は松田洋輔、横山幸子、土屋和章が担当したほか、浅川行雄氏、バリノ・サーヴェイ株式会社の調査・分析結果を得て山下泰永が統括した。執筆分担は以下のとおりである。
土屋和章：第1章、第2章3、第3章 浅川行雄：第2章1 横山幸子：第6章2
バリノ・サーヴェイ株式会社：第7章 松田洋輔：前記以外
- 4 本書で使用した主な引用・参考文献は、巻末に一括して掲載した。ただし、第2章1及び第7章は文末に掲載した。
- 5 遺跡の地理的環境の現地調査及び報告書作成は、浅川行雄氏に依頼した。
- 6 土器附着炭化物及び炭化材の自然科学分析は、バリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託した。
- 7 本書掲載の調査に関する出土遺物及び事務書類、記録類は安曇野市教育委員会が保管している。
- 8 調査全般にわたり以下の方々から、ご指導・ご協力をいただいた。(敬称略・五十音順)
浅川行雄、島田哲男、株式会社ハーモニック・ドライブ・システムズ、百瀬新治

凡 例

- 1 発掘調査及び整理作業に際し、遺跡略号として遺跡名のアルファベットと調査年度（西暦2015年）の組み合わせである次の表記を、遺物注記等に使用した。
新林遺跡第3次発掘調査：SB15
- 2 調査及び本書での遺構名は、次の略号を使用している。
SB：敷石住居跡 SD：溝状遺構 P：ピット
- 3 遺構・遺物の法量の表示で、残存箇所のみを計測した場合は（ ）で示した。
- 4 本書実測図で遺物は次のように表現した。また、縮尺は各図に示した。
縄文土器：断面無地 石器欠損部：剥離面内空白 石器摩耗部：グレー
- 5 縄文土器の記載では、器形について「形土器」の表記を省略した。
例 深鉢形土器：深鉢
- 6 石器石材等の記載では、慣例に従い「黒曜岩」を「黒曜石」と表記した。
- 7 土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 8 本書では、平成17年10月1日の町村合併より前の旧郡名・旧町村名について「旧」を省略し、「南安曇郡」、「穂高町」のように表記した。
- 9 文献引用等に際し、各機関の名称を以下のように省略した。
埋蔵文化財センター：埋文センター 教育委員会：教委

目 次

序

例言・凡例

目次・挿図目次・挿表目次・写真目次

第1章 調査の契機と経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	6
第3章 調査の方法	14
第4章 層序	16
第5章 遺構	17
第6章 遺物	21
第7章 自然科学分析	29
第8章 調査の総括	34
写真図版	36
引用・参考文献	41
調査報告書抄録	

挿図目次

第1図	試掘調査位置図	4	第12図	SB1	18
第2図	新林遺跡周辺位置図	6	第13図	SB1 遺物出土状況	19
第3図	レリーフ図	7	第14図	SD1	20
第4図	新林遺跡付近の地質図	8	第15図	出土土器1	24
第5図	掘削西面の断面図	9	第16図	出土土器2	25
第6図	平成24年度工事立会出土遺物	11	第17図	出土土器3	26
第7図	発掘調査位置図	12	第18図	出土石器	27
第8図	新林遺跡付近の遺跡	13	第19図	分析試料	29
第9図	調査区配置図	14	第20図	炭化材	31
第10図	調査区全体図	15	第21図	暦年校正結果	32
第11図	土層図	16	第22図	安曇野市内出土の兩耳壺	34

挿表目次

第1表	昭和63年(1988)試掘調査の結果	3	第6表	平成24年度工事立会採集土器観察表	28
第2表	新林遺跡発掘調査記録	11	第7表	出土土器観察表	28
第3表	新林遺跡付近の遺跡	13	第8表	出土石器観察表	28
第4表	器種分類	21	第9表	放射性炭素年代測定及び暦年校正結果	32
第5表	文様分類	21			

写真目次

1	新林遺跡遠景(東から)	36	12	SD1(北から)	37
2	新林遺跡遠景(南西から)	36	13	A区全景(北から)	37
3	調査区全景(北東から)	36	14	B区全景(南から)	37
4	調査区全景(南東から)	36	15	川窪沢川	37
5	調査前(南から)	36	16	平成24年度工事立会採集土器	37
6	A区表土除去中(北から)	36	17	出土土器1	38
7	A区検出状況(北から)	36	18	出土土器2	39
8	B区検出状況(南から)	36	19	出土土器3	40
9	SB1敷石(南から)	37	20	出土石器1	40
10	SB1敷石(南西から)	37	21	出土石器2	40
11	埋甕炉(東から)	37			

第1章 調査の契機と経過

1 事務局の体制

新林遺跡第3次発掘調査

所在地 長野県安曇野市穂高牧1856番1

調査面積 316㎡

発掘作業 平成27年(2015)4月27日(月)～平成27年(2015)5月29日(金)

整理作業 平成27年(2015)6月1日(月)～平成29年(2017)3月31日(金)

2 事業計画の概要

新林遺跡第3次発掘調査の調査原因となった事業は、株式会社ハーモニック・ドライブ・システムズによる鉄骨造4層の立体駐車場建設である。建設予定地の約半分は、昭和63年(1988)の試掘調査で遺構等が確認されたため盛土保存されていた。

3 調査の契機と経過

新林遺跡第3次発掘調査は、立体駐車場建設にかかる緊急発掘調査で、調査原因となる事業の工事主体者は株式会社ハーモニック・ドライブ・システムズである。

新林遺跡では、昭和61年(1986)3月に、当時の町道西穂高321号線(現在の市道穂高4321号線)改良工事に際して穂高町教育委員会が第1次発掘調査を実施しており、縄文時代中期前半から後半にかけての集落跡が確認されている(穂高町郷土資料館編1987、穂高町誌編纂委員会編1991)。

第2次調査では、昭和61年(1986)12月に町道改良工事に際し、縄文時代中期後半の遺構・遺物が確認されたため、穂高町教育委員会が緊急発掘調査を実施し記録保存の措置を講じた。

また、今回の第3次発掘調査地点を含む民間事業者の敷地では、昭和63年(1988)3月14～16日に社屋・工場新築に先立ち穂高町教育委員会が試掘調査を実施した。総延長約3,500mのトレンチ調査の結果、敷地内のA～D地区で遺構等が確認された(第1図)。今回の第3次発掘調査区は、このうちA・B地区に該当する。当時の試掘調査でA・B地区から堅穴建物跡等の遺構及び縄文時代前～後期の土器が出土したため、盛土をして埋蔵文化財を現状保存することとし、社屋・工場はこの両地区を避けて建設された。

このような状況のなか、平成26年(2014)12月2日に、民間事業者から安曇野市教育委員会に対し、敷地内での工場増築及び立体駐車場建設計画が提示された。このうち立体駐車場建設予定地が、前述の盛土保存A・B地区に該当し遺構等が存在するため、早急に残存状況を確認するための試掘調査を実施することで合意した。

試掘調査は文化財保護法第99条に基づき、平成26年(2014)12月18日に実施した(安曇野市教委

2016a)。試掘調査では、立体駐車場建設予定地の南北に1箇所ずつ合計2箇所のトレンチ（A～B）を設定し、土層観察及び遺構・遺物の検出を試みた。この結果、A・Bトレンチともに土層が良好に残存しており、縄文土器も包含されていることが確認できた。このため、調査結果の報告と併せて事業者と再度保護協議を実施した。この協議の中で、立体駐車場建設の計画は変更不可能であり、施工によって埋蔵文化財への影響が不可避であることが確認されたため、記録保存のための発掘調査を実施する方向で協議・調整を継続することとなった。

埋蔵文化財保護協議を継続するなかで、平成27年（2015）3月11日付けで事業主体者から「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出」（文化財保護法第93条第1項）が提出され、3月11日付け安曇野市教育委員会教育長の意見書を付して長野県教育委員会教育長にあて進達した。これに対し、3月20日付け「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」で長野県教育委員会教育長から、この計画についての埋蔵文化財保護措置を記録作成のための発掘調査とする旨の通知があったため、この通知に基づき発掘調査を実施することとなった。また、発掘調査実施に際しては4月20日付けで株式会社ハーモニック・ドライブ・システムズを委託者、安曇野市長を受託者として「埋蔵文化財発掘調査契約」を締結した。この契約によって、発掘調査費用を事業者が負担し、安曇野市教育委員会が調査主体となって発掘調査を実施することとなった。なお、この原契約で定めた委託料については発掘調査終了後に調査費用を精算し、12月15日付けで「埋蔵文化財発掘調査委託契約の一部を変更する契約」を締結して減額した。

発掘調査における現場作業は、平成27年（2015）4月27日（月）～5月29日（金）に実施した。調査終了後、安曇野市教育委員会教育長名で、6月1日付け安曇野警察署長あて埋蔵物発見届、6月11日付け長野県教育委員会教育長あて発掘調査終了報告書を提出した。6月22日には、長野県教育委員会教育長から安曇野市教育委員会教育長あてに「文化財の認定及び県帰属について（通知）」が通知され、出土遺物の文化財認定がなされた。当該文化財については平成27年（2015）12月5日までに所有者が判明せず所有権が長野県に帰属したため、12月8日付け「出土文化財譲与申請書」を長野県教育委員会教育長にあて提出し、12月18日付け長野県教育委員会指令27教文第24-12号にて安曇野市への譲与が承認された。

4 試掘・確認調査

新林遺跡では、昭和63年（1988）3月14～16日に株式会社ハーモニック・ドライブ・システムズの工場建設に先立ち遺構等の分布状況を把握するため、穂高町教育委員会によって試掘調査が実施された。調査はトレンチ法を採用し、幅1mのトレンチを設定して総延長約3,500m、面積約3,500㎡、平均掘削深度約15cmの掘削を行った。調査の結果、敷地内の4箇所（A～D）で遺構等が確認された。試掘調査当時の状況は、第1表のとおりである。

第1表 昭和63年（1988）試掘調査の結果

A地区	地 形	東向きの緩傾斜地、やや中央が高い。ロームまでの深さは10～15cm程。
	遺構の存在	トレンチにより確認された住居跡は8軒。まだ多くの住居跡が存在するものと思われる。
	保存状況	遺構面が浅いため、既に開墾の際に部分的に破壊されている。土器等の散乱が著しい。
	時 代	縄文時代前期から後期
	今後の対応	部分的には破壊されているが、調査地区全体では保存状態はよく、遺構の密度も高く、盛土をして保存をしたい。
B地区	地 形	東向きの緩傾斜地、やや南にも傾斜している。ロームまでの深さは南側は深く30cm程であるが、あとは平均5cm程でロームが既に露出しているところもある。
	遺構の存在	トレンチにより確認された住居跡は3軒。遺構の密度は低い。
	保存状況	南側は遺構面が深く保存状況も良いが、ほかは浅いため耕作により削られており、ほとんどが破壊されている。土器の出土はわずかである。
	時 代	縄文時代前期から後期
	今後の対応	南側については盛土保存の必要がある。
C地区	地 形	東向きの緩傾斜。ロームまでの深さは15cm程である。
	遺構の存在	焼土が見られた地点が4ヶ所あったが、いずれも畑の直下であるため、現在の畑の耕作に伴うものと思われる。土器等も、ほとんど見られない。
	保存状況	—
	時 代	—
	今後の対応	開発には支障はない。
D地区	地 形	東向きの緩斜面。ロームまで深さは10cm程である。
	遺構の存在	焼土が見られた地点が2ヶ所、土器の出土地点が3ヶ所あった。
	保存状況	遺構面が浅いため、耕作によりかなり破壊されている。土器の出土はわずかである。
	時 代	縄文時代前期から後期
	今後の対応	盛土保存が望ましい。

新林遺跡第3次発掘調査に先立ち、昭和63年（1988）の試掘調査成果に加えて、工場敷地造成時の造成土量等を確認して発掘調査の積算を行うため、平成26年（2014）12月18日に文化財保護法第99条に基づく確認調査を実施した。調査は、立体駐車場建設計画範囲のうち遺構が盛土保存されている箇所南北2箇所（A～B）を設定して、造成土の厚み及び遺構の確認を行った。この結果、北側のAトレンチ、南側のBトレンチの両方で層厚約120cmの造成土の下層にシルト質土壌を掘り込んで遺構が存在することが確認できた。このうち、Bトレンチからは少量の縄文土器が出土した。



第1図 試掘調査位置図

5 調査体制

調査主体 安曇野市教育委員会

調査担当者 山下泰永（文化課課長補佐兼文化財保護係長）、土屋和章（文化課文化財保護係）

調査員 大澤慶哲、松田洋輔、土屋和章（以上、文化課文化財保護係）

発掘作業参加者 江口渉、小穴金三郎、勝野辰雄、金子三雄、北林節子、権藤誠人、
田中喜一、等々力哲男、中井秀雄、中嶋鐵彌、中村哲也、三澤俊秀

整理作業参加者 田多井智恵、細尾みよ子、横山幸子

事務局 安曇野市教育委員会教育部 文化課

那須野雅好（文化課長）

山下泰永（文化課課長補佐兼文化財保護係長）、土屋和章（文化財保護係）

6 発掘作業・整理作業の経過

新林遺跡第3次発掘調査における現場での発掘作業は、平成27年（2015）4月27日（月）～5月29日（金）に実施した。詳細は、調査日誌抄として後述する。また、遺跡の地理的環境及び地質関連事項にかかわる現地調査は浅川行雄氏に依頼し、調査期間中に実施した。

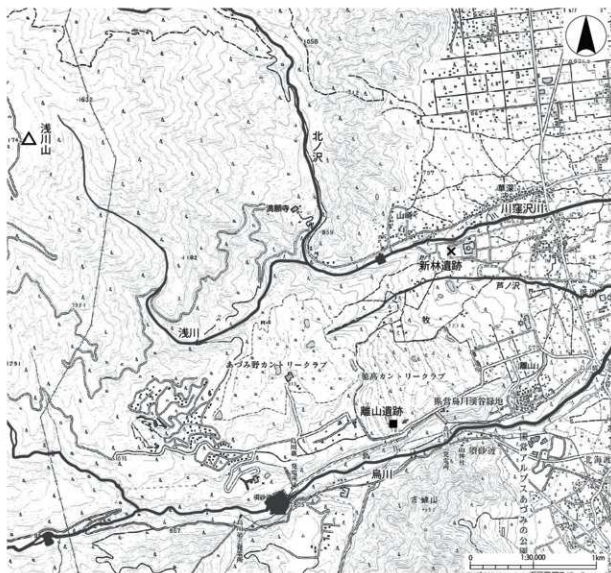
整理作業は平成27年（2015）6月1日（月）～平成29年（2017）3月の期間中に断続的に実施し、本書を発行し全事業を終了した。整理作業においては、遺物の洗浄、注記を平成27年度中に終了し、平成28年度は図版整理、遺物実測図作成、写真撮影及び報告書執筆を行った。

7 調査日誌抄

平成27年（2015）	5月14日（木）	検出作業。SB1、SD1精査。現場撤収を開始。
4月27日（月）		表土除去開始。
4月28日（火）	5月15日（金）	SB1、SD1、ビット精査。
4月30日（木）	5月18日（月）	SB1、SD1精査。
5月1日（金）	5月19日（火）	SB1精査。
5月7日（木）	5月20日（水）	SB1、SD1精査。
5月8日（金）	5月21日（木）	SB1、SD1精査。
5月11日（月）	5月22日（金）	現場撤収。
5月12日（火）	5月29日（金）	現場引き渡し。
風接近のため現場作業中止。		
5月13日（水）		検出作業。SB1、ビット精査。

第2章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境



第2図 新林遺跡周辺位置図 (国土地理院2万5千分の1地形図から作成)

(1) 地理的環境

新林遺跡は長野県安曇野市穂高牧1856番1にある。ここは松本盆地の平坦部と西山山麓部との接点にあたる、標高が約710mの地点である。この地点のすぐ北側では川窪沢川が東流し、約1.5km南方には鳥川が流れている。縄文遺跡の離山遺跡は当遺跡の南南西約1.4kmの所にある。

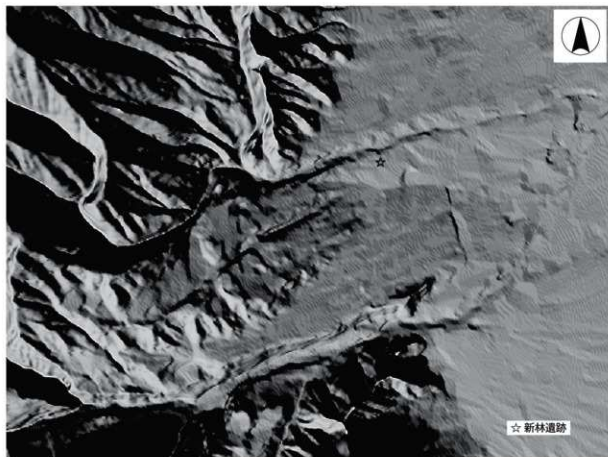
川窪沢川は、浅川山北方から流れ出す北ノ沢と浅川山に源流をもつ浅川が満願寺南方で合流した河川で、さらに東流して鳥川へと流れ込んでいる。川窪沢川の両岸には山崎から草深付近にかけて比高約10mの段丘地形が認められる。

鳥川は当地域では大きな河川で、その流域に複数の河岸段丘や扇状地を形成している。河岸段丘は丘

陵化した高位段丘面（河床との比高約200m）や平坦面が明瞭な中位段丘面（河床との比高がおおよそ70mから140m）・低位段丘面（河床との比高がおおよそ10mから15m）が認められる。

新林遺跡の約250m南を流れる芦ノ沢は丘陵化した高位段丘面に源流をもち、流量に比べて大きな谷をつくっている。砂礫層から洗い出された花こう岩の巨礫が沢沿いに露出する。

新林遺跡は川窪沢川がつくった扇状地の段丘化した地形面上にある。川窪沢川河床との比高は約10mである。川窪沢川右岸のこの地点では地形面はゆるく南東側に傾斜していて、芦ノ沢付近で烏川が形成した段丘面を覆っている。

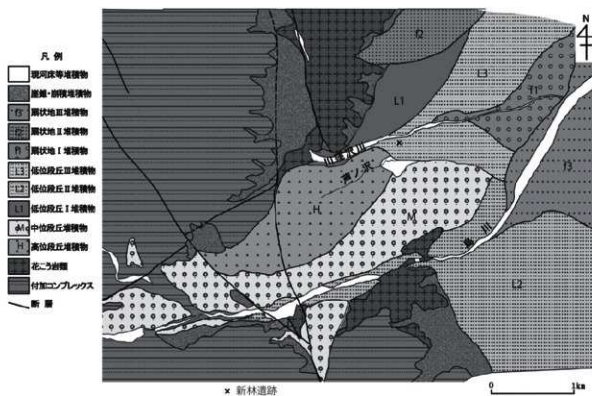


第3図 レリーフ図（国土地理院基盤地図情報10m標高をカシミール3Dにて描画）

(2) 地質

新林遺跡の西側山地を構成する地質は中生代の付加コンプレックスと花こう岩類である。中生代の付加コンプレックスは砂岩・泥岩・チャートなどの堆積岩で構成され、花こう岩類の近くでは熱変性作用を受けてホルンフェルスとなっている。花こう岩類は粗粒の黒雲母花こう岩で中生代の終わり頃から新生代の初めにかけて形成されたものである。風化が顕著で、マサ土化しているところが多い。

高位段丘堆積物（H）は烏川右岸から川窪沢川にかけて分布している。花こう岩類や砂岩・泥岩の礫とシルト・砂のマトリックスからなる砂礫層で、良く締まっている。烏川の支流である一ノ沢上流に分布する花こう岩類の礫を多く含む。特に花こう斑岩の礫を含むのが特徴である。北アルプス起源の中期更新世テフラをのせる。片丘礫層に対比されている。



第4図 新林遺跡付近の地質図

中位段丘堆積物 (M) は主に烏川右岸に広く分布し、花こう岩類・砂岩・泥岩の礫とシルト・砂のマトリックスからなる砂礫層で、比較的良く締まっており、明瞭な段丘地形をつくっている。波田礫層に対比され、波田ローム層をのせる。

低位段丘Ⅰ堆積物 (L1) は、主に川窪沢川沿いから左岸に分布する。川窪沢川上流右岸で礫層上に厚さ1 m以上のローム層をのせる。このローム層は特徴のあるバブルウォール型の火山ガラスを含む。また川窪沢川左岸の耕作地では、厚さ数10cmの黒色耕土の下に厚さ不明の花こう岩細礫混じりのローム層があり、この細礫混じりローム層も特徴のあるバブルウォール型の火山ガラスを含む。後背山地を構成する花こう岩の風化マサ土とローム層の二次堆積物と推定される。火山ガラスの特徴から、この細礫混じりローム層は始良Tnテフラ (AT) 降下以降に形成された可能性が大きい。

低位段丘Ⅱ堆積物 (L2) は、烏川右岸に広く分布している。花こう岩類・砂岩・泥岩の礫とシルト・砂のマトリックスからなる砂礫層でルーズである。表層には礫混じりローム層をのせる。森口礫層に対比されている。塩尻市片丘の本堆積物に相当する森口礫層の表層では、波田ローム層の最上部が風成で乗り、2.6~2.9万年前の始良Tnテフラを挟んでいる (原山他2009)。

低位段丘Ⅲ堆積物 (L3) は、川窪沢川の両岸に分布する。砂岩・泥岩および粗粒花こう岩の礫とシルト・砂のマトリックスからなる砂礫層で、ルーズである。後背山地のホルンフェルスの礫を多く含む。低位段丘Ⅱ堆積物 (L2) と同様に表層に礫混じりローム層をのせる。

扇状地Ⅰ堆積物 (f1) は、川窪沢川がつくる新しい扇状地性堆積物で、砂岩・泥岩と少量の粗粒花

こう岩の礫とシルト・砂のマトリックスからなる砂礫層で、表層部にローム層を混入していない。

扇状地Ⅱ堆積物 (f2) は、花こう岩山地から流れ出す小沢がつくる小さな扇状地堆積物である。マサ土から構成される。

扇状地Ⅲ堆積物 (f3) は、烏川がつくる一番新しい扇状地堆積物である。砂岩・泥岩・花こう岩類の礫とシルト・砂のマトリックスからなる砂礫層である。

崖錐・崩積堆積物は山麓部に広く分布し、基盤岩の角礫を含む表層土である。時にロームを混入する。新林遺跡西方を通る断層沿いには特に厚い本堆積物が広く分布している。

現河床等堆積物は現在の河川流路沿いに堆積する砂礫層で、氾濫原堆積物を含む。新林遺跡南の芦ノ沢では湿地をつくっている。

断層は西側山地で、南-北方向、北西-南東方向、南西-北東方向に走るものが認められる。

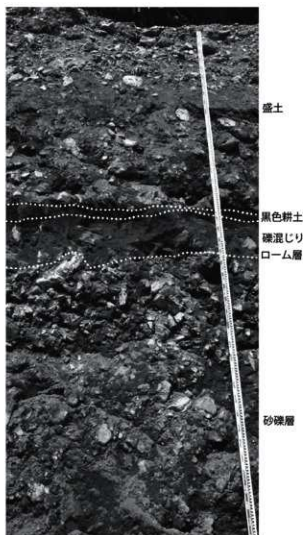
(3) 発掘地点断面の地質

発掘地点は、過去に造成工事で地表部の一部が改変された場所である。最上部にはこの時に出た掘削土が黒色耕土の上に盛られている。

畑の耕作土である黒色耕土は、ビニール片を含むことがある。西面では工事により削割されていて厚さは薄く、北面で厚くなる。その厚さは最大約90cmとなる。

礫混じりローム層は低位段丘Ⅱ堆積物 (L2) の表層部で、厚さは30~120cmと不規則であるが、北側の川窪沢川に近づくにつれて厚くなる傾向がある。ロームに含まれる鉱物を実体顕微鏡で観察したところ、パブルウォール型の火山ガラスを含む低位1段丘堆積物 (L1) 表層部のローム層の鉱物組成と共通点がある。

砂礫層は川窪沢川がつくった扇状地堆積物を構成する主要な層であるが、厚さは不明である。礫は礫径が2~30cm程度の亜角礫で、礫種は砂岩・泥岩およびそれらのホルンフェルスで、粗粒花こう岩礫はきわめて少なく、あっても風化している場合が多い。基質は褐灰色粘土や灰色の砂やシルトでルーズな



第5図 掘削西面の断面図

部分や締まった部分が混在する。見かけの角度で6～10°南に傾斜していて、地形面と調和的である。

参考文献・資料

- 伊藤真人 (1983) 北アルプス南東部蝶ヶ岳付近の水河地形と堆積段丘。地理学評論, vol.56, pp. 35-49
原山智・大塚勉・酒井潤一・小坂共栄・駒澤正夫 (2009) 松本地域の地質。地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅)、産業技術総合研究所地質調査総合センター
町田洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス。東京大学出版会
国土地理院空中写真アーカイブ
1948 46-VV8TR9-R-459-7ITRG-22NOV48-1121-152.8-10000-3619N13750E-MATSUMOTO /
1948 44-VV 8 TRS-R-459-7ITRG-22NOV48 / 1948 45-VV 8 TRS-R-459-7ITRG-22NOV48 / 1962 CB-62-11X C9-6 / 1962 CB-62-11X C9-7 / 1962 CB-62-11X C10-8 / 1962 CB-62-11X C10-9

2 歴史的環境

新林遺跡が所在する北アルプス山麓には、縄文時代の遺跡が複数確認されている。三郷小倉の東小倉遺跡、南松原遺跡、黒沢川右岸遺跡、堀金三田のそり表遺跡、神沢遺跡、穂高牧の新林遺跡、離山遺跡、他谷遺跡等で発掘調査が実施され集落遺跡が確認された。離山遺跡は、新林遺跡の南方を東流する烏川の扇頂部に位置する遺跡である。昭和46年(1971)に実施された発掘調査では、約500mに及ぶ配石遺構や2棟の敷石住居跡等が確認され、中期後半から晩期の遺物が出土している(穂高町教委1972)。その他に、調査以外で早期や前期の遺物も採集されている(穂高町誌編纂委員会編1991)。他谷遺跡は川窪沢川の扇尖に所在し、新林遺跡の北東に位置する。平成11年(1999)に発掘調査が実施され、中期から後期の住居跡45棟が確認され、このうち6棟が敷石住居である(穂高町教委2001)。また、犀川東岸の明科地域では、ほうろく屋敷遺跡、潮遺跡群塩田若宮遺跡(以下「塩田若宮遺跡」とする。)、こや城遺跡、上手屋敷遺跡、光遺跡群北村遺跡(以下「北村遺跡」とする。)等で発掘調査が実施され、ほうろく屋敷では中期を中心とした集落跡、北村遺跡では中期後半から後期の集落跡と多数の土壌墓が確認された(明科町教委1991、長野県埋文センター1993)。

弥生時代は、穂高地域では矢原遺跡群周辺に後期の遺構、遺物が発掘調査等によって確認されている。また、平成26年(2014)に穂高南小学校プール改築工事に伴い実施された塩田宮南遺跡の発掘調査で、穂高地域では初めて中期の集落跡が確認された(安曇野市教委2016b)。安曇野市全域でみると、三郷小倉の黒沢川右岸遺跡、豊科田沢の町田遺跡、明科七貴のみどりヶ丘遺跡で発掘調査によって中期の集落跡が確認されている。

穂高地域では馬場街道遺跡、藤塚遺跡等で古墳時代の集落跡が発掘調査によって確認されている。藤塚遺跡では、古墳時代後期の住居跡30棟と掘立柱建物5棟が確認された。また、堀金地域、穂高地域の北アルプス山麓や明科地域には後期の古墳群が築かれている(穂高町誌編纂委員会編1991)。

矢原遺跡群では、古代の集落跡が確認されており、馬場街道遺跡では8世紀に比定される竪穴住居跡3棟、10～11世紀に比定される竪穴住居跡5棟、土壘1基等が確認された(穂高町教委1987)。明科地域では、県内最古級の7世紀末に創建されたと考えられる古代寺院跡である明科遺跡群明科廃寺が確認

されている（明科町教委2000）。

穂高地域では、中世以降の遺構がほとんど確認されていない。確認されている遺構は馬場街道遺跡では住居跡1棟、他谷遺跡で地下式遺構1基である（穂高町教委1987、2001）。

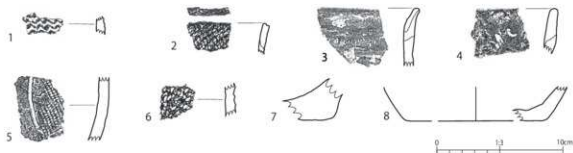
3 新林遺跡の概要

新林遺跡では、今回までに2次にわたる発掘調査が実施されている（第2表、第7図）。第1次調査は道路改良に際して実施された発掘調査で、幅6m、延長110mの範囲から縄文時代中期後半を主体とする集落跡が確認された。この調査では在地の土器に加え、北陸系の土器も一定量出土している。第2次調査も道路改良に伴う発掘で、調査面積は狭小であるが縄文時代中期最終末の敷石住居跡が確認され、床面からは埋設土器も出土した。

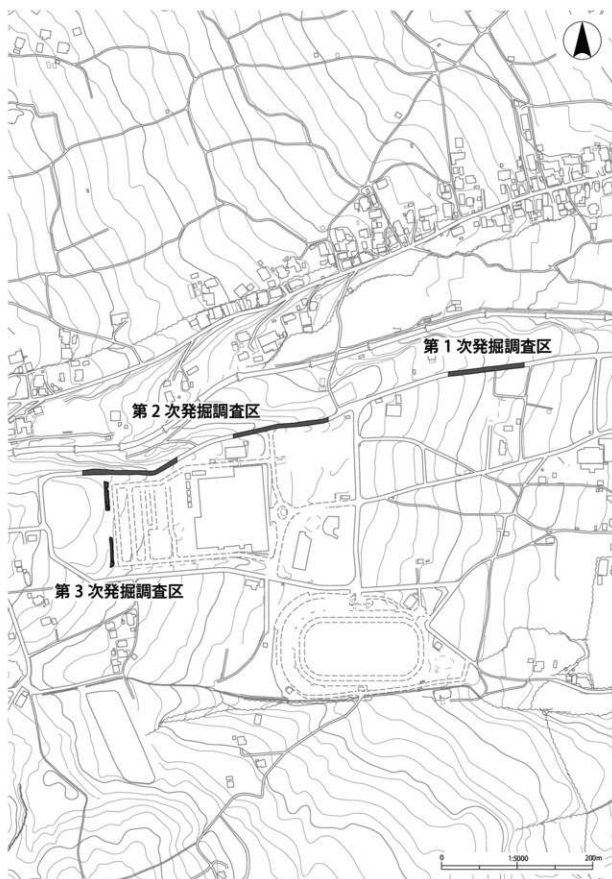
第2表 新林遺跡発掘調査記録

次数	調査年	調査原因	遺構・遺物の概要	文献
第1次	昭和61年 (1986)	道路改良	竪穴住居跡（縄文中期前半）2、 竪穴住居跡（縄文中期後半）16、 集石遺構、溝、土壇	穂高町郷土資料館編1987 穂高町誌編集委員会編1991
第2次	昭和61年 (1986)	道路改良	竪穴住居跡、敷石住居跡、 縄文土器	未報告
第3次	平成27年 (2015)	立体駐車場	敷石住居跡1、縄文土器	安曇野市教委2017（本書）

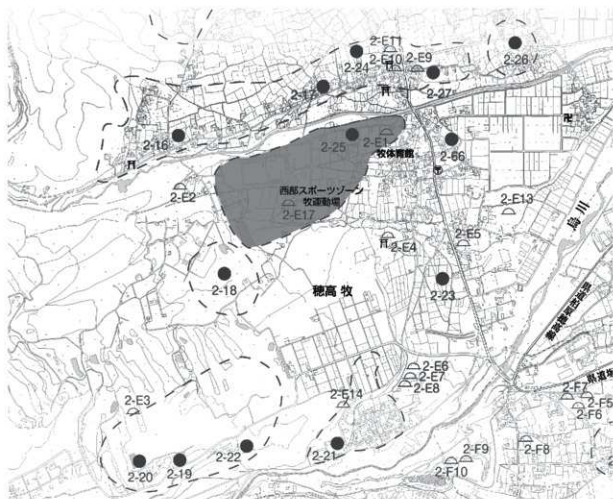
近年は、遺跡内で小規模な土木工事等に際して工事立会も実施しており、遺跡内容が判明しつつある。このうち、平成24年度に、穂高牧1872番6で実施した個人住宅建設に伴う工事立会では、縄文土器等が採集された（第6図）。採集資料には縄文時代早期の押型文土器や縄文時代前期の土器が含まれており、付近に縄文時代早期から前期の遺構等が存在する可能性が高い。



第6図 平成24年度工事立会出土遺物



第7図 発掘調査位置図



第8図 新林遺跡付近の遺跡 (1/17,500)

第3表 新林遺跡付近の遺跡

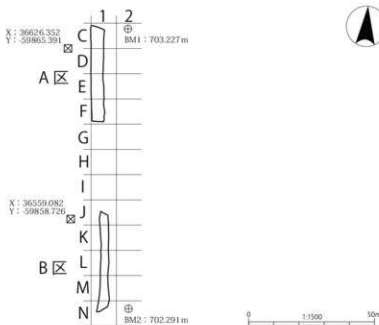
No.	遺跡名	種類	時代	No.	遺跡名	種類	時代
2-16	山崎遺跡	集落跡	縄文中期-後期	2-E5	E5号墳(上人塚)	古墳	古墳
2-17	草深遺跡	集落跡	縄文中期-後期	2-E6	E6号墳(狐塚3号)	古墳	古墳
2-18	十三層敷遺跡	集落跡	縄文	2-E7	E7号墳(狐塚2号)	古墳	古墳
2-19	離山遺跡	集落跡	縄文	2-E8	E8号墳(狐塚1号)	古墳	古墳
2-20	大坂遺跡	集落跡	縄文中期	2-E9	E9号墳(前田塚)	古墳	古墳
2-21	堰下遺跡	集落跡	縄文・古墳	2-E10	E10号墳(寺島塚)	古墳	古墳
2-22	ショウナツナ遺跡	集落跡	縄文中期後半-後期-弥生	2-E11	E11号墳(神谷塚)	古墳	古墳
2-23	南原遺跡	集落跡	縄文前期後半	2-E13	E13号墳(浜塚)	古墳	古墳
2-24	神谷遺跡	集落跡	縄文中期後半-後期	2-E14	E14号墳(離山1号)	古墳	古墳
2-25	新林遺跡	集落跡	縄文早期-後期	2-E17	E17号墳(ショウシハウ)	古墳	古墳
2-26	荒神堂遺跡	集落跡	縄文	2-F5	F5号墳	古墳	古墳
2-27	他谷遺跡	集落跡	縄文・中世	2-F6	F6号墳(元塚大明神)	古墳	古墳
2-66	寺前・北田遺跡	散布地	中世	2-F7	F7号墳	古墳	古墳
2-E1	E1号墳(西牧塚)	古墳	古墳	2-F8	F8号墳	古墳	古墳
2-E2	E2号墳(三郎塚)	古墳	古墳	2-F9	F9号墳(二ツ塚)	古墳	古墳
2-E3	E3号墳	古墳	古墳	2-F10	F10号墳(二ツ塚)	古墳	古墳
2-E4	E4号墳(鎌塚)	古墳	古墳				

第3章 調査の方法

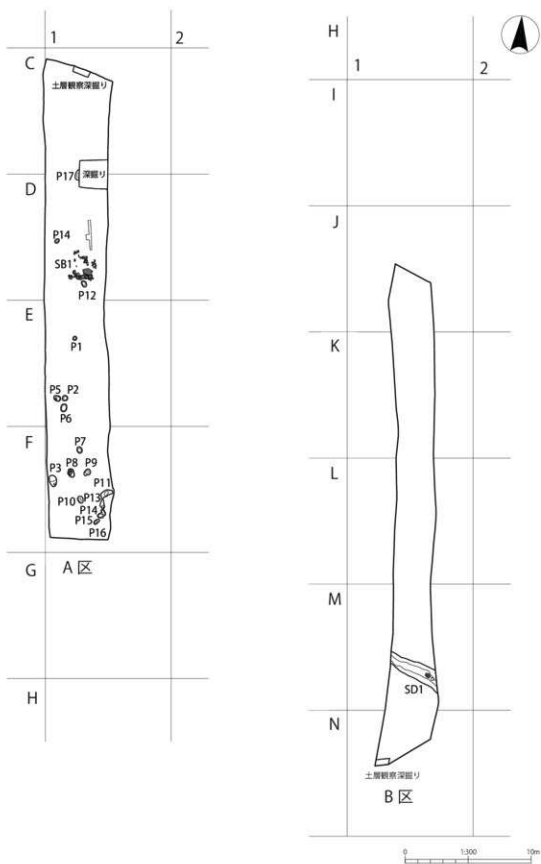
新林遺跡第3次発掘調査の調査原因である立体駐車場の建設地が、周知の埋蔵文化財包蔵地内であり、これまでの試掘調査結果から遺構が良好に残存している可能性が極めて高いため、記録保存のための発掘調査を念頭に保護協議を継続した。この結果、工事での掘削によって埋蔵文化財への影響が不可避であることが確認された。このため、開発事業者と保護協議を継続し、発掘調査を実施して遺跡の記録保存をはかった。

発掘調査では、北からA区、B区の調査区を設定した。さらに、株式会社ハーモニック・ドライブ・システムズによって工場敷地内に設定された1辺10mの任意グリッドを利用し、調査用グリッドを再設定した。遺構、遺物の所在については、この調査用グリッドを基本として記載している。表土除去は、重機を用いて工場造成時の造成土を除去し、造成土下の土層の掘削及び遺構検出は、人力で行った。遺物の取り上げは基本的に遺構ごとに行い、遺構外出土遺物についてはグリッドごとに行った。遺構観測は調査用グリッドを基準として、調査員・作業員が現場で簡易遺方測量した。記録写真は現場・整理ともに主としてデジタルカメラを使用した。

整理作業は、現場作業終了後に室内で行い、土器等の洗浄、注記、接合、実測、属性観察、図版作成・調整、写真撮影等及び報告書作成を行った。



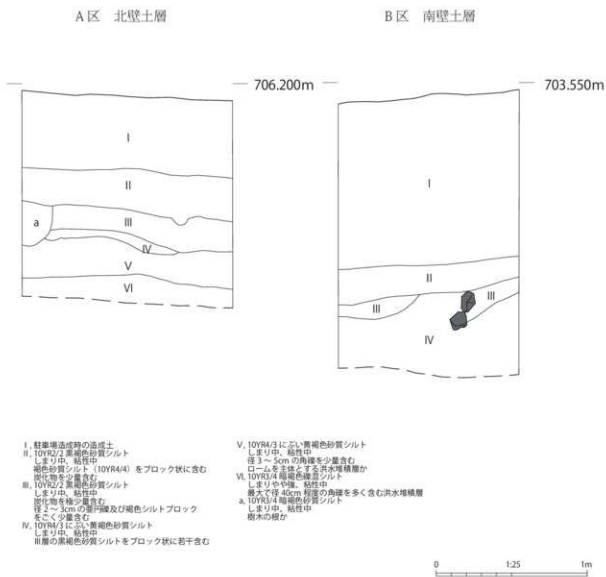
第9図 調査区配置図



第10図 調査区全体図

第4章 層序

今回の調査での土層の詳細は第11図の通りである。基本土層はⅠ～Ⅵに大別される。このうちⅠ層は工場敷地造成時に遺跡保護のために盛土された造成土で、Ⅱ～Ⅵ層が自然堆積層である。このうち、Ⅲ層のみで遺物の包含を確認した。そのため、遺物包含層であるⅢ層上面で遺構検出を試み、ピットや敷石住居跡を検出した。遺構検出面より下層では、礫を含む洪水堆積層と考えられる層を確認した。



第11図 土層図

第5章 遺構

新林遺跡第3次発掘調査で確認された遺構は、敷石住居跡1軒、ピット、溝状遺構である。A区で16基のピットが検出されたが、掘立柱建物跡になるような組み合わせは確認できなかった。確認された遺構のほとんどが北側のA区にあり、南側のB区からは溝状遺構のみを確認した。今回の調査区では、南にいくにつれて遺構の分布密度が低くなっている。

1 SB1

A区D1グリッドに位置する、敷石住居跡と考えられる遺構である。重機による表土除去作業時に径40～60cm程度の礫が密集して出土したため、礫出土地点を中心に精査を開始した。その結果、約0.9×2mの範囲に礫が平坦面を上向きにして敷き詰めるように配置されていることが確認された。敷石付近の精査で遺構の平面形の検出を試みたが、輪郭をつかむことができなかったため、土層確認用のサブトレンチを設定して断面観察を行ったが、遺構の掘り込みは確認できなかった。したがって、敷石部分以外は、住居の床面もしくは、床面下であると考えられる。このため、住居跡の規模や平面形は不明である。

床面付近を精査したところ、敷石の北側に口縁部の約2分の1が残存している深鉢の破片（第15図2）と径10～20cm程度の礫が組み合わされて埋設されており、その内外から少量ではあるが焼土が確認された。住居の規模や平面形は不明だが、住居の中心付近に位置する埋壺だと考えられる。また、住居に付属するピットを念頭に丹念に床面を検出したが確認できなかった。

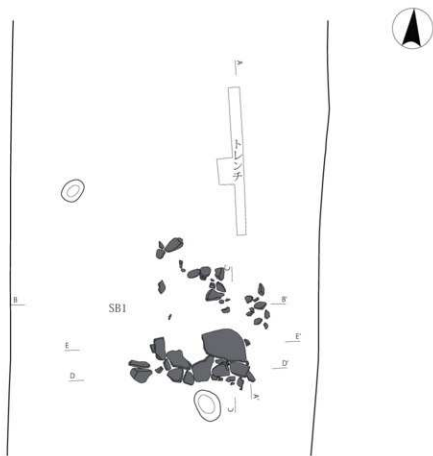
敷石については、今回確認できたのは全体の一部分であるため、敷石全体の形状は不明である。敷石を除去後に敷石下から完形品に近い形の両耳壺が正位の状態出土している（第15図1）。敷石住居跡は、穂高地域では、新林遺跡2次調査で1棟、離山遺跡で2棟、他谷遺跡で6棟確認されている（穂高町教委1972、2001）。

遺物は、縄文時代中期末の土器や石鏃等の石器が出土している。床面から出土した第15図1・2の土器により遺構の時期は、『長野県史』の時代区分に準じ縄文時代中期後葉Ⅳ期と考えられる（長野県編1988）。

2 SD1

B区M1グリッドに位置する、幅約1～1.5m、深さ約0.1～0.2mの溝状遺構である。B区を約N60°Wに走るが、調査区域外に伸びているため全長は不明である。溝内には径10～40cm程度の礫が密集しているが、調査区内では配列の規則性等はみられなかった。

覆土には、炭化物を若干含む箇所があり、礫を除去すると溝の底部に径50cm程度の範囲の焼土が確認された。遺物として、縄文土器片がごく少量出土している。



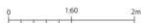
SB1 セクション図



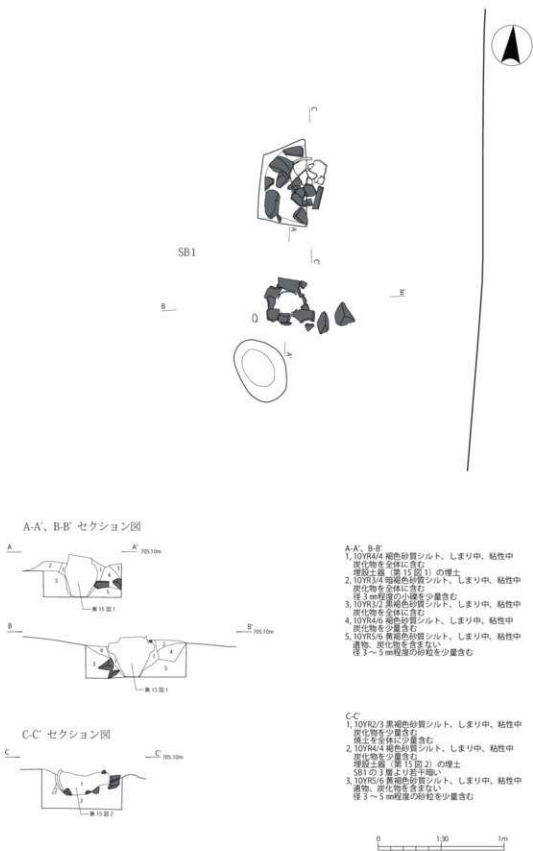
散石エレベーション



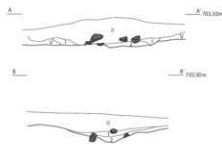
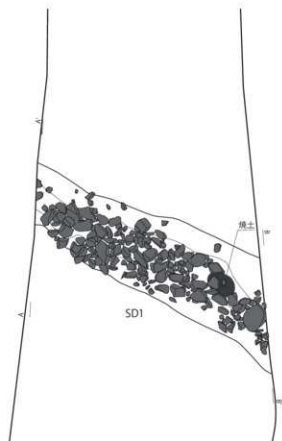
- 1, 10YR2/3 黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中炭化物を粉状に少量含む
+ 細片を少量含む
径 5 mm 程度の小礫を少量含む
- 2, 10YR3/3 暗褐色砂質シルト、しまり中、粘性中炭化物を粉状に多く含む
+ 細片を含む
径 5 mm 程度の小礫を少量含む
- 3, 10YR4/4 赤褐色粘質シルト、しまり中、粘性中炭化物、遺物を含む
黒褐色土をブロック状に含む
- 4, 10Y5/5 黄褐色粘質シルト、しまり中、粘性中遺物、炭化物を含まない
径 3~5 mm 程度の砂粒を少量含む



第12図 SB1



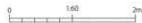
第13図 SB1 遺物出土状況



- SD1
1. 10YR2/3 黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
径 10 ~ 40cm の角礫を多く含む
炭化物を若干含む
 2. 10YR4/4 褐色砂、しまり中、粘性弱
炭化物を含まない

基本土層

- I. 10YR2/2 黄褐色砂質シルト
しまり中、粘性中
褐色砂質シルト (10YR4/4) をブロック状に含む
炭化物を少量含む
- V. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト
しまり中、粘性中
径 3 ~ 5cm の角礫を少量含む
ロームを主体とする洪水堆積層が



第14図 SD1

第6章 遺物

新林遺跡第3次調査では、縄文時代中期末の遺物が主体的に出土した。主な遺物は、縄文土器、石鏃、打製石斧、二次加工のある剥片である。

1 縄文土器

今回の発掘調査で出土した加曾利EⅢ式並行期から称名寺式並行期の縄文土器の記載は、北村遺跡、塩田若宮遺跡第2次調査報告書の分類を基本に類型を追加した（長野県埋文センター1993、安曇野市教委2011）。

器形は深鉢、鉢、注口深鉢、両耳壺に分類される。これらの4種類の器形はさらに口縁部の形態や文様帯の位置から15器種に、文様は、施文手法と文様意匠の組み合わせにより24類型に細別される。

第4表 器種分類

A1	口縁が平らで、胴上部がキャリバー形ないし直線的に開く。口辺部に文様帯をもつ。
A2	口縁が平らで、胴上部がキャリバー形ないし直線的に開く。口辺部に文様帯をもたない。
B1	口縁が波状で、胴上部がキャリバー形ないし直線的に開く。口辺部に文様帯をもつ。
B2	口縁が波状で、胴上部がキャリバー形ないし直線的に開く。口辺部に文様帯をもたない。
C1	口縁に突起が付き、胴上部がキャリバー形ないし直線的に開く。口辺部に文様帯をもつ。
C2	口縁に突起が付き、胴上部がキャリバー形ないし直線的に開く。口辺部に文様帯をもたない。
D1	口縁が大波状で、胴上部から口辺部にかけてキャリバー形。有孔橋状突帯をもつ。
D2	口縁が大波状で、胴上部から口辺部にかけてキャリバー形。有孔橋状突帯をもたない。
E1	口縁は平らで、胴下部から胴中部に向けて直線的に開く。胴上部に至って内曲する。
E2	口縁は平らで、胴下部から胴中部に向けて直線的に開く。口縁に向けて直線的に開く。
F	口縁は平らで、口辺部がやや内湾するが胴下部から上部に向けて直線的に開く。
G	口縁は平らで、胴が張り口辺部が外折する。
H	胴部が張り、口縁に向けて内湾する。口径に比して器高が同じか小さい。
I	胴部が張り、口辺部には一対の橋状把手をもつ。注口は把手の下に付く。
J	口縁は平らで、胴部が張る。一対の環状把手が付く。

※北村遺跡発掘調査報告書（長野県埋文センター1993）を参考にした。

第5表 文様分類

1a	口辺部に横位連結渦巻文を配し、渦巻間に楕円区画文をもつ。胴部は沈線により縦に分割される。口辺部の区画内や胴部に縄文が充填される。
1b	口辺部に横位連結渦巻文を配し、渦巻間に楕円区画文をもつ。胴部は沈線により縦に分割される。口辺部の区画内や胴部に綾杉文が施文される。
2	口辺部に渦巻文と楕円区画文を交互に配する。胴部は沈線により縦に分割される。
3a	口辺部に渦巻文が配され、これを繋ぐ降線が口辺部と胴部の文様帯を分割している。胴部に縄文が施される。
3b	口辺部に渦巻文が配され、これを繋ぐ降線が口辺部と胴部の文様帯を分割している。胴部に綾杉文が施される。
4	口辺部に楕円区画文を並べる。胴部は沈線により縦に分割される。
5	口辺部と胴部の文様帯を分割する降線が角状突起に連結している。口辺部には渦巻文などを配し、胴部は逆「U」字の沈線で区画した上、区画内に縄文を充填している。
6	口辺部と胴部の文様帯を2条の降線で分割し、降線間に刺突を並べる。胴部は多条の沈線で縦に分割した上、縄文を充填している。

7a	口辺部に文様はなく、胴部を逆「U」字の沈線または隆線で縦に区画し、縄文を充填する。
7b	口辺部に文様はなく、胴部を逆「U」字の沈線または隆線で縦に区画し、綾杉文を施文する。
8a	胴部の逆「U」字が縦区画の意味を喪失しているもの。逆「U」字が二重の沈線で描かれ、沈線間または外に縄文が充填される。
8b	胴部の逆「U」字が縦区画の意味を喪失しているもの。逆「U」字が繊細な沈線になり、地文がほとんどみられない。
9a	胴部のくびれ付近で文様意匠が変化している。上部と下部の組み合わせが、「U」字と逆「U」字からなる。
9b	胴部のくびれ付近で文様意匠が変化している。下部の逆「U」字が上部の「U」字間に貫入している。
9c	胴部のくびれ付近で文様意匠が変化している。上部と下部の組み合わせが、楕円と逆「U」字からなる。
9d	胴部のくびれ付近で文様意匠が変化している。上部と下部の組み合わせが、横「S」字あるいは大柄な「J」字と逆「U」字からなる。
10	口辺部を巡る一条の線から胴部に直線を垂下させ縦に分割している。隆線を用いる場合と、沈線を用いるものがある。いずれも胴部には縄文を充填している。
11	口辺部に有孔橋状突帯文をもつ。胴部は楕円・三角・四角文で区画され、縄文が施される場合が多い。
12	胴部に大柄な渦巻文を描き、綾杉文を充填している。
13	口辺部から胴部に沈線で並走する直・曲線を描いているもの。沈線間に縄文・刺突文をもつもの他、無文の場合がある。
14	胴部の縦長に向き合う弧線間に振幅の細かい蛇行垂重を施している。沈線は太くて深い。
15	口辺部に平行する沈線を横走させて、その間に斜線や波線などを配する。胴部は条が縦方向に走るよう縄文を施したものが多い。
16	胴部に文様意匠がない。無文のもの他、縄文・懸糸文・綾杉文または雨重状の短沈線文・刺突文などがみられる。
17	上記に当てはまらないもの

※北村道跡発掘調査報告書（長野県埋文センター1993）を参考にした。

今回出土した土器のほとんどが破片であり、完形に近い形に復元できたものはSB1の敷石下から出土した第15図1のみである。1は両耳壺であり、体部には勾玉文や勾玉文から下垂する直線と波状の沈線が交互に施されている。把手の位置は、土器の中心より背面側であり、土器の垂直軸から約8度ずれて付いている。胴部が張り、その最大径は胴部中心のやや上の胴部上半で、器高が36.1cmでやや縦長の器形である。このような器形を持つ両耳壺は、安曇野市内では東小倉遺跡第1次調査の出土土器に類例がある（三郷村教委1995）。第15図2はSB1の埋壺炉で使用されていた土器である。口縁部は約2分の1が残存しており、胴部には、逆「U」字状の隆線内に勾玉文と綾杉文が施されている。また、第15図1・2の埋設土器や埋壺炉内に詰まっていた土壌を回収し室内でフレイにかけ、微細遺物等の検出を試みた結果、1内の土壌から部位不明のクリの炭化材が検出された。第15図3は、勾玉文が簡略化されたかのような、楕円形が口縁部下に周り、胴部には逆「U」字の沈線が2重に施されている。内面には、炭化物が付着しており、放射性炭素年代測定をしたところ縄文時代中期後半から終末頃の年代が推定された。第16図はSB1出土の破片資料である。破片資料では、勾玉文や綾杉文が施される土器に加えて、6のような磨消縄文が施される土器も出土している。

第17図19～39は遺構外から出土した土器である。口縁部または底部が残存しているものを中心に抽出し、報告する。A・B区の遺構外からも、主にSB1と同時期の遺物が出土している。

縄文時代中期末以外と考えられる土器では、19、29がある。19の内面には条痕がみられ、29の胴部に

は羽状を呈する縄文が施されているため、これらの土器は縄文時代早期・前期に比定した。このため、19、29については、今回使用した土器分類に該当しない。なお、縄文時代早期・前期の遺構等の存在を確認するため、A区のC1・D1グリッド境界付近に約2×2mの深掘り調査区を設定し、本調査の検出面下層を確認したが、遺構や遺物は確認されなかった。

2 石器

今回出土した石器・剥片等7点を資料化して第18図に示した。なお、資料化しなかった剥片等は72点で、出土した石器及び剥片の総重量は約1.5kgである。

(1) 石鏃

鏃形が認識できる鋭利な小型石器を取り上げた。1はSB1の検出面から、2はSB1内部から出土した。1は凹基無茎鏃で、黒曜石製であり残存長軸1.1cmを測る。先端部が欠損し、基部は円形に湾曲する。厚さは0.2cmとごく薄く、長軸方向の断面形態は背面中央がややせり出す緩やかなアーチ形をなす。腹面側は一次剥離面の面積割合が高く、二次加工の割合は2に比して少ない。2も同様に凹基無茎鏃で、黒曜石製であり残存長軸1.3cmを測る。先端部及び脚部が一部欠損している。基部は長軸に対し非対称に抉入する。1と対照的に全面を二次的に剥離している。

(2) 二次加工のある剥片

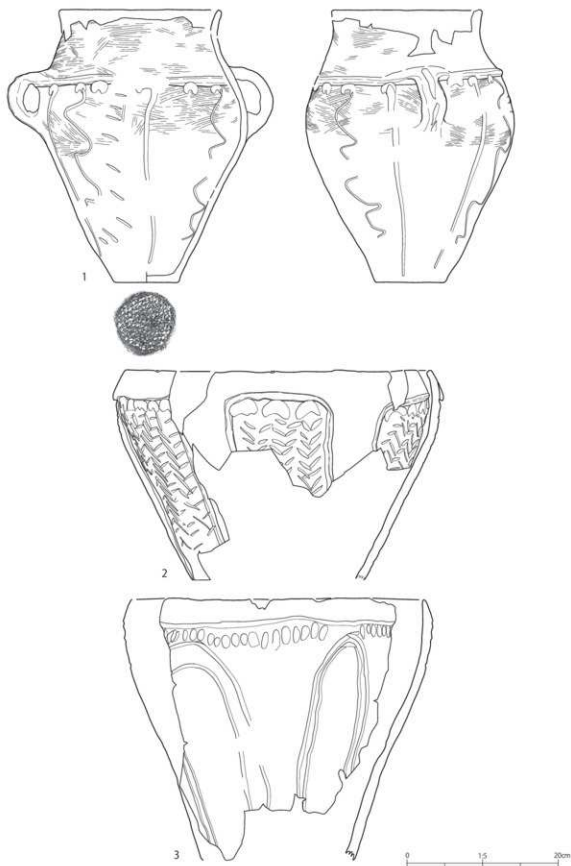
3はSB1で出土し、長軸2.5cmで、基部が最も厚く0.6cmを測るが、下部ほど薄くなっている。石材は黒曜石製である。不規則な外形をしており、腹面で主剥離面を大きく残している。両縁は整形されているが、末端部は縁辺を残している。

(3) 打製石斧

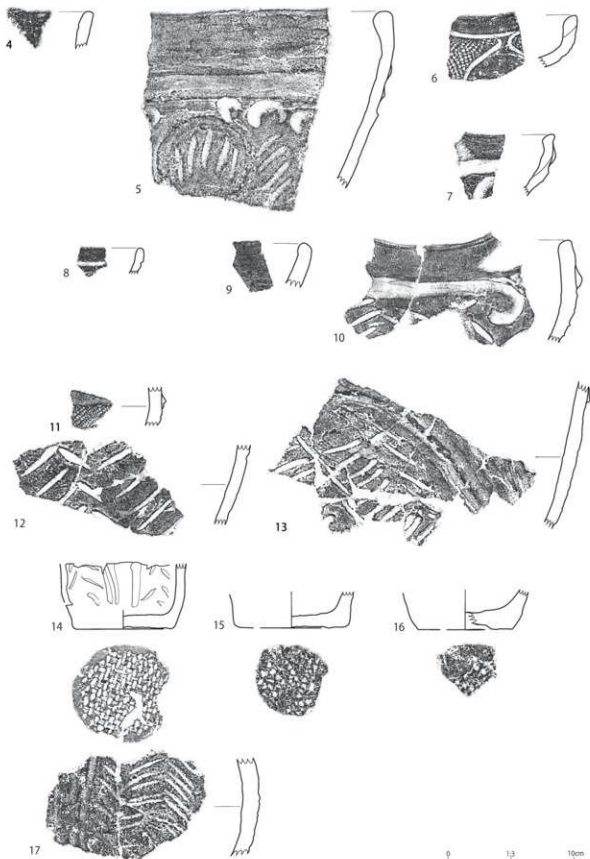
長方形または長楕円形で、両縁に整形がある石器を取り上げた。4、5、7の3点を数える。4、5はSB1から、7はB区の検出面から出土した。4は長軸9.7cm、幅4.7cmで、基部に自然面を残す。刃部から胴部の中ほどまでの縁辺及び刃部に摩耗がみられる。5は長軸12.6cm、幅5.1cmを測る。胴部中央で頭部と刃部の2つに割れ、いずれもSB1内で2.5m程度離れて出土した。刃部から胴部にかけて摩耗しており、長軸に平行ないしやや斜交した擦れが確認できる。7は残存長軸7.2cm、幅3.6cmを測り、基部が欠損している。厚さ0.9cmと薄いことから、欠損部と合わせても4、5と同様かそれ以下の大きさと考えられる。刃部にわずかな摩耗がある。

(4) 磨製石斧

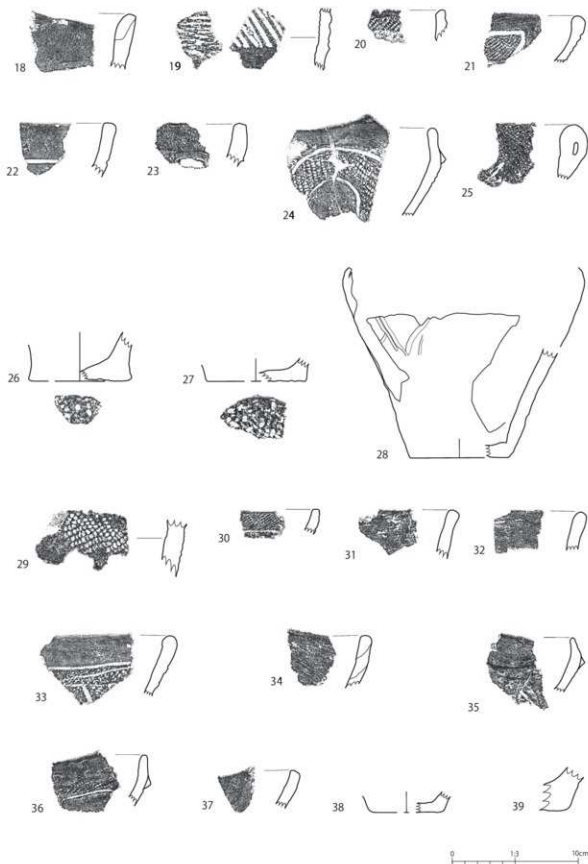
両面に研磨がみられる石器を取り上げた。6の1点のみであり、SB1から出土した。長軸10.5cm、幅5.0cmを測る。楕円形で、両面が研磨されている一方で、縁辺部に剥離面を残している。研磨は一部で剥離面にも及んでおり、磨製石斧の未成品と考えられる。



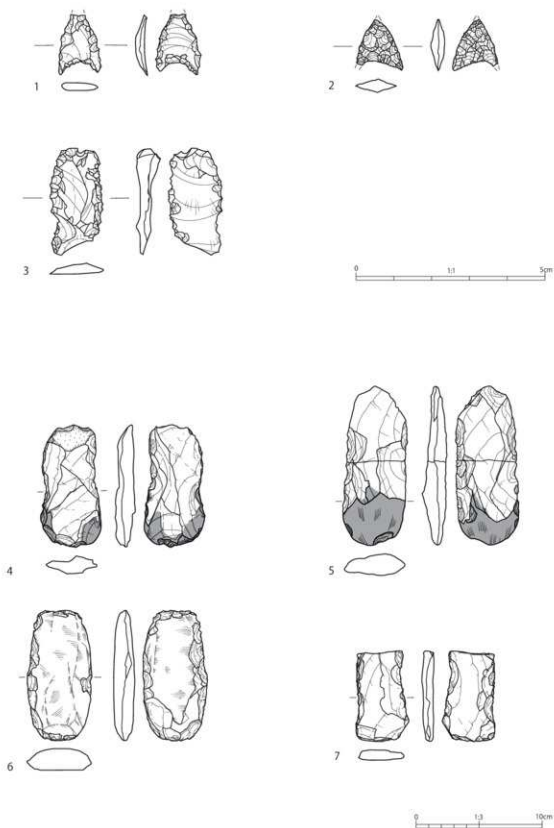
第15図 出土土器 1



第16図 出土土器 2



第17図 出土土器 3



第18図 出土石器

第6表 平成24年度工事立会採集土器観察表

図	No.	器形	器種	文様	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴			残存部
								外面調整	内面調整	底部	
6	1	深鉢	-	-	不明	不明	不明	押型文	ナデ	不明	胴部
6	2	深鉢	A1	不明	不明	不明	不明	ナデ+縄文	ナデ	不明	口縁部
6	3	深鉢	A2	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部
6	4	深鉢	A2	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部
6	5	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ+縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	胴部
6	6	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ+縄文	ナデ	不明	胴部
6	7	深鉢	不明	不明	不明	不明	(3.3)	ナデ	ナデ	不明	底部
6	8	深鉢	不明	不明	不明	114	(2.7)	ナデ	ナデ	ナデ	底部

第7表 出土土器観察表

図	No.	出土地点	器形	器種	文様	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴			残存部
									外面調整	内面調整	底部	
15	1	SB1	両耳壺	J	17	不明	8.1	36.1	ナデ+隆線+勾玉文+沈線+短沈線	ナデ	副代板	口縁部~胴部下半
15	2	SB1	深鉢	A2	7b	40.5	不明	(27.8)	ナデ+隆線+勾玉文+綾紗文	ナデ	不明	口縁部~胴部下半
15	3	SB1	深鉢	A2	8b	38.8	不明	(34.7)	ナデ+沈線	ナデ	不明	口縁部~底部
16	4	SB1	深鉢	A	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部
16	5	SB1	深鉢	A2	不明	不明	不明	不明	ナデ+隆線+勾玉文+短沈線	ナデ	不明	口縁部~胴部上半
16	6	SB1	深鉢	B2	8a	不明	不明	不明	ナデ+縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部
16	7	SB1	深鉢	B2	不明	不明	不明	不明	ナデ+沈線	ナデ	不明	口縁部
16	8	SB1	深鉢	B2	不明	不明	不明	不明	ナデ+縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部
16	9	SB1	深鉢	B2	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部
16	10	SB1	深鉢	B2	不明	不明	不明	不明	ナデ+隆線+沈線+綾紗文	ナデ	不明	口縁部
16	11	SB1	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ+隆線+縄文	ナデ	不明	胴部
16	12	SB1	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ+綾紗文	ナデ	不明	胴部
16	13	SB1	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ+隆線+綾紗文	ナデ	不明	胴部
16	14	SB1	深鉢	不明	不明	不明	7.6	(5.2)	ナデ+沈線+綾紗文	ナデ	副代板	底部
16	15	SB1	深鉢	不明	不明	不明	8.0	(2.9)	ナデ	ナデ	副代板	底部
16	16	SB1	深鉢	不明	不明	不明	7.6	(3.2)	ナデ	ナデ	副代板	底部
16	17	SB1	鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ+沈線+綾紗文	ナデ	不明	胴部
17	18	P16	深鉢	B2	不明	不明	不明	不明	ナデ+沈線	ナデ	不明	口縁部
17	19	AIRC1検出	深鉢	-	不明	不明	不明	不明	ナデ+斜行沈線	条痕	不明	胴部
17	20	AIRC検出	深鉢	A1	不明	不明	不明	不明	ナデ+縄文	ナデ	不明	口縁部
17	21	AIRC1検出	深鉢	A2	13	不明	不明	不明	ナデ+縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部
17	22	AIRC検出	深鉢	A2	不明	不明	不明	不明	ナデ+沈線	ナデ	不明	口縁部
17	23	AIRC検出	深鉢	A2	不明	不明	不明	不明	ナデ+勾玉文	ナデ	不明	口縁部
17	24	AIRC1検出	深鉢	B2	8a	不明	不明	不明	ナデ+縄文+隆線+沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部~胴部上半
17	25	AIRC1検出	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ+縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部
17	26	AIRC1検出	深鉢	不明	不明	不明	7.6	(3.9)	ナデ	ナデ	副代板	底部
17	27	AIRC検出	深鉢	不明	不明	不明	7.6	(1.8)	ナデ	ナデ	副代板	底部
17	28	AIRC1検出	深鉢	不明	不明	不明	8.0	(15.2)	ナデ+綾紗文	ナデ	不明	胴部上半~底部
17	29	BRCN1検出	深鉢	-	不明	不明	不明	不明	ナデ+縄文	ナデ	不明	胴部
17	30	BRC検出	深鉢	A1	不明	不明	不明	不明	ナデ+縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部
17	31	BRC検出	深鉢	A2	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部
17	32	BRC検出	深鉢	A2	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部
17	33	BRCM1検出	深鉢	A2	不明	不明	不明	不明	ナデ+縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部
17	34	BRCM2検出	深鉢	B2	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部
17	35	BRCN1検出	深鉢	B2	不明	不明	不明	不明	ナデ+隆線+縄文	ナデ	不明	口縁部
17	36	BRC検出	深鉢	B2	不明	不明	不明	不明	ナデ+隆線+縄文+沈線	ナデ	不明	口縁部
17	37	BRC検出	深鉢	B2	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部
17	38	BRC検出	深鉢	不明	不明	不明	5.0	(1.7)	ナデ	ナデ	ナデ	底部
17	39	BRC検出	深鉢	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ+沈線	ナデ	ナデ	底部

第8表 出土土器観察表

図	No.	出土位置	種別	石材	色調	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
18	1	SB1検出	石鏝	黒曜石	透明度の高い灰色	(1.6)	1.1	0.2	(0.3)
18	2	SB1	石鏝	黒曜石	透明度の高い灰色	(1.3)	(1.2)	0.4	(0.4)
18	3	SB1	二次加工のある刮片	黒曜石	透明度の高い灰色	29	1.4	0.6	1.5
18	4	SB1	打製石斧	砂岩	灰色	9.7	4.7	1.6	91.1
18	5	SB1	打製石斧	砂岩	黄灰色	12.6	5.1	1.8	123.5
18	6	SB1	磨製石斧	磨結凝灰岩	黄灰色	10.5	5.0	1.7	146.8
18	7	BRC検出	打製石斧	砂岩	緑灰色	(7.2)	3.6	0.9	(38.0)

第7章 自然科学分析

新林遺跡第3次発掘調査の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

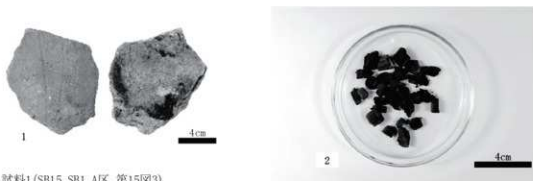
新林遺跡（長野県安曇野市穂高牧）は、松本盆地西縁の山地より流下する川窪沢川の右岸に分布する河岸段丘上に立地する。本遺跡は、過去に行われた発掘調査により縄文時代中期の集落跡であることが明らかとされているが、平成27年度に実施された発掘調査では縄文時代と考えられる遺構や遺物が確認されている。

本報告では、発掘調査により確認された遺構や遺物の年代、出土炭化材の樹種や木材利用の検討を目的として、自然科学分析調査を実施した。

1 試料

試料は、竪穴住居跡より出土した土器片（試料1：SB15 SB1 A区 第15図3）と、土器内より出土した炭化材（試料2：SB15 SB1 A区 第15図1土器内）の2試料である。試料1は土器内面に黒色を呈する炭化物が認められる試料であり、試料2は複数の炭化材（1cm角前後）からなる試料である（第19図）。

本分析では、試料1の土器内面付着炭化物と試料2より選択・抽出した炭化材の2点を放射性炭素年代測定に供し、試料2の放射性炭素年代測定に供した炭化材を対象に樹種同定を行った。なお、炭化材試料は、長さ1cm、幅0.8cm、厚さ1cm程度の分割材（ミカン割）状を呈する、樹皮および最終形成年輪を欠く破片である。



1. 試料1 (SB15 SB1 A区 第15図3)
2. 試料2 (SB15 SB1 A区 第15図1土器内)

第19図 分析試料

2 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

試料表面の汚れや付着物をピンセットなどにより物理的に除去する。次に塩酸や水酸化ナトリウムを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する（酸-アルカリ-酸処理,AAA処理）。その後超純水で中性になるまで洗浄し、乾燥させる。なお、アルカリ処理は、0.001M～1Mまで濃度を上げ、試料の様子をみながら処理を進める。1Mの水酸化ナトリウムで処理が可能であった場合はAAAと記す。一方、試料が脆弱で1Mの水酸化ナトリウムでは試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度の水酸化ナトリウムの状態で処理を終える。その場合はAaAと記す。

精製された試料を燃焼してCO₂発生させ、真空ラインで精製する。鉄を触媒とし、水素で還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) を測定する。AMS測定時に、標準試料とバックグラウンド試料の測定も行う。δ¹³Cは試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma,68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告 (Stuiver and Polach,1977) に従う。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

なお、暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い (¹⁴Cの半減期5,730±40年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正曲線は暦年代がわかっている遺物や年輪 (年輪は細胞壁のみなので、形成当時の14C年代を反映している) などを用いて作成されており、最新のものは2013年に発表されたIntcal13 (Reimer et al.2013) である。また、較正年代を求めるソフトウェアはいくつか公開されているが、今回はOxCal4.2 (Bronk & Lee.2013) を用いる。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが慣例とされている (Stuiver and Polach, 1977)。ただし、本報告では、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う再計算に対応できるよう、結果表には丸めない値 (1年単位) を記している。

(2) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の3断面の断面を複製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類 (分類群) を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、鳥地・伊東 (1982) やWheeler他 (1998) を参考にする。また、日

本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995-1999）を参考にする。

3 結果

(1) 放射性炭素年代測定

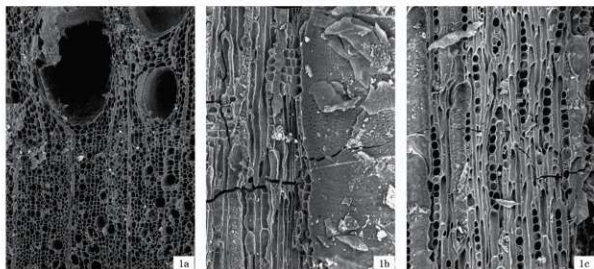
試料の同位体補正を行った測定結果（補正年代）は、試料1（土器付着炭化物：SB15 SB 1 A区 第15図3）が $3,975 \pm 20$ BP、試料2（炭化材：SB15 SB 1 A区 第15図1土器内）が $4,050 \pm 20$ BPである。また、暦年校正結果（ 2σ ）は、試料1が4,516 - 4,414 calBP、試料2が4,779 - 4,438 calBPである（第9表、第21図）。

(2) 樹種同定

放射性炭素年代測定に供した炭化材（試料2）は、広葉樹のクリに同定された。以下に解剖学的特徴等を記す。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) プナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外でやや急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。



1. クリ (SB15 SB 1 A区 第15図1土器内; 試料2)
a: 木口, b: 柾目, c: 板目

100 μ m: a
100 μ m: b, c

第20図 炭化材

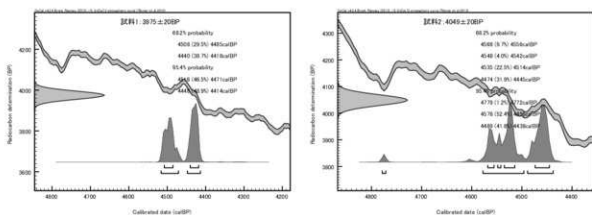
4 考察

(1) 遺構・遺物の年代

竪穴住居跡 (SB15 SB1) より出土した土器片の付着炭化物 (試料1) および土器内出土炭化材 (試料2) の放射性炭素年代測定結果に基づく暦年較正結果 (2σ) は、試料1が4,516 - 4,414 calBP、試料2がcalBP 4,779 - 4,438 calBPであった。これらの結果について、小林 (2008) を参考とすると、縄文時代中期後半～終末頃の年代が推定される。

第9表 放射性炭素年代測定及び暦年較正結果

試料名	処理方法	補正年代 (BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (BP)	暦年較正結果		測定番号
					1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲	
試料1 SB15 SB1 A区 第15層 3 土器付着炭化物	AaA	3975 ± 20	-23.22 ± 0.17	3975 ± 20	4508 (29.5%) 4485calBP 4440 (38.7%) 4418calBP	4516 (46.5%) 4471calBP 4448 (48.9%) 4414calBP	PLD-33420
試料2 SB15 SB1 A区 第15層 1土器内 炭化材 (クリ)	AaA	4050 ± 20	-26.81 ± 0.20	4049 ± 20	4568 (9.7%) 4556calBP 4548 (4.0%) 4542calBP 4535 (22.5%) 4514calBP 4474 (31.9%) 4445calBP	4779 (1.2%) 4772calBP 4578 (52.4%) 4496calBP 4489 (41.8%) 4438calBP	PLD-33421



第21図 暦年較正結果

なお、2試料の暦年代範囲は概ね近似するが、炭化材試料が若干古い値を示した。試料2は部位不明の炭化材であったことから、伐採年代 (使用年代) ではなく測定した年輪の年代を反映していると考えられる。そのため、SB1 および出土土器の年代の評価にあたっては、出土遺物の考古学的所見および上記した古木効果の影響も含めた検討が望まれる。

(2) 木材利用

竪穴住居跡より出土した土器 (第15図1) 内に確認された炭化材 (試料2) は、広葉樹のクリに同定された。クリは、二次林などに生育する落葉高木であり、木材の材質は重硬で強度・耐朽性が高いとき

れる。ただし、炭化材試料は、前述のように小片であったため、本来の形状や用途の推定は困難であった。

なお、縄文時代中期頃の周辺地域におけるクリの木材利用についてみると、立石遺跡・長峯遺跡（茅野市）、塩倉池遺跡（松本市）、熊久保遺跡（朝日村）などの堅穴住居跡から出土した炭化材に確認されており（伊東・山田2012）、これらの状況から建築部材として強度や耐久性の高いクリ材が利用されていたことが窺える。また、中沢（2012）による長野県内における縄文時代中期の種実等の植物遺存体の集成によれば、クリが出土する遺跡数が多いことが指摘されている。今回の試料に炭化材が確認されたことから、種実を植物質食料として利用できる環境にあったと思われる、今後これらの利用状況を示す炭化種実などの調査事例の蓄積が期待される。

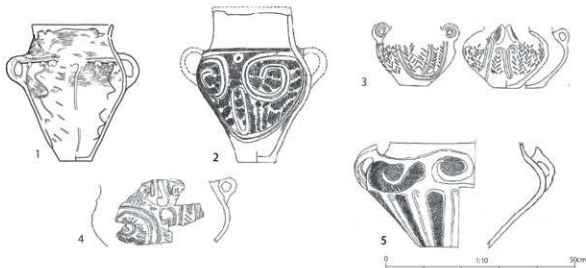
引用文献

- Bronk Ramsey, C., & Lee, S., 2013, Recent and Planned Developments of the Program OxCal. Radiocarbon, 55, 720-730.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東崇夫・山田昌久（編）2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海青社, 449p.
- 小林謙一, 2008, 縄文土器の年代（東日本）, 小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器, 小林達雄（編）, 総覧縄文土器刊行委員会, 896-903.
- 中沢彦彦, 2012, 長野県における縄文時代中期の植物質食料の利用について, 長野県考古学会50周年プレシムposium 縄文時代中期の植物利用を探る 予稿集, 長野県考古学会縄文中期部会, 21-29.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Halldason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J., 2013, IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.
- 鳥地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- Stuiver, M. and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of ^{14}C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.（編）, 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩（日本語版監修）海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E., 1989, IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第8章 調査の総括

今回の調査では遺跡内西方で立体駐車場建設に際し、調査面積316㎡の発掘を実施した。調査の結果、縄文時代中期最終末の敷石住居跡が確認され、敷石下からは埋設土器が出土した。調査区内での遺構分布密度は低かったが、遺跡内での遺構分布を検討するために重要な調査成果となった。

1 敷石住居跡と出土遺物について



第22図 安曇野市内出土の両耳壺

- 1 新林遺跡、2 東小倉遺跡（三郷村教委1995）、3 北村遺跡（長野県埋文センター1993）
4 塩田若宮遺跡（安曇野市教委2011）、5 こや城（明科町教委1977）

A1K1グリッドに位置するSB1では、敷石の一部と埋設炉等を確認できたが、床面の平面形が不明確で、遺構の規模や形状は不明である。確認された敷石は、約0.9×2mの範囲に径40～60cm程度の礫が平坦面を上向きに、敷き詰めて配置されている。敷石下からは、両耳壺が正位で出土している。両耳壺は安曇野市内では、こや城、北村遺跡、塩田若宮遺跡や東小倉遺跡の出土土器に類例がある（第22図）。中でも東小倉遺跡出土の両耳壺は胴部がそれほど張らず、やや縦長の器形であり、今回出土した両耳壺と形態が類似している。

安曇野市内の敷石住居跡は、今回の調査で確認されたものを含め、新林遺跡、離山遺跡、他谷遺跡、五反田遺跡、ほうろく屋敷遺跡、宮ノ前遺跡、北村遺跡、こや城、塩田若宮遺跡で合計56棟あり、縄文時代中期後葉から後期前葉に属する。そして、ほとんどの敷石住居が今回の調査で確認されたものと同じように、敷石の残存部が部分的である傾向にある。

SB1出土石器は6点ある（第18図1～6）。構成は、石鏃2点、二次加工のある剥片1点、打製石斧2点、磨製石斧1点となっている。このうち1～3の剥片石器は黒曜石製であった。出土石器について、市内で敷石住居跡の確認された、こや城、塩田若宮遺及び他谷遺跡と比較すると、打製石斧と石鏃

が石器組成の中心となり、磨製石斧も含まれる点では調和的である（明科町教委1979、安曇野市教委2011、穂高町教委2001）。一方で、SB1では凹石や磨石等が出土していない点特徴的である。今後は、遺構単位での石器組成の比較が課題といえる。

2 遺跡内の遺構分布

新林遺跡の中央付近にあたる第2次調査東調査区では遺構が確認されていない。また、昭和63年（1988）の試掘結果からも、遺跡内中央の一帯には遺構が存在しないことがわかる（第1図）。

新林遺跡内の東よりに位置する第1次調査区では、660㎡の範囲から縄文時代中期後半の竪穴建物跡が16棟確認されており、100㎡あたり約2.4棟の密度である。第1次調査区から、約500m西に第2次調査西調査区と第3次調査区が位置する。第3次調査区の縄文時代中期最終末の遺構密度は、100㎡あたり約0.3棟と相対的に低い。

調査範囲は遺跡のごく一部であるが、これらの結果から遺跡内の東側は、縄文時代中期後半の遺構が高い密度で存在し、中央付近の遺構空白地帯を挟んで遺跡内西側に縄文時代中期最終末の遺構が密度低く存在する可能性が考えられる。

3 今後の課題

今回の調査では、縄文時代中期最終末の遺物に混じり、縄文時代早期・前期の遺物が少量出土している。このことから、古い時代の遺構等の存在を確認するため調査区内に2×2mの深掘り調査区を設定して、検出面より下層を確認したが、遺物や遺構は確認できなかった。このため、早期・前期の集落は下層に存在するのではなく、これまでの発掘調査区とは別の場所に存在する可能性が考えられる。

新林遺跡を南北に挟むように東流する芦ノ沢、川窪沢川の対岸に、新林遺跡とほぼ同時期の大きな集落をもつ離山遺跡と他谷遺跡がある。離山遺跡は、昭和46年（1971）に発掘調査が実施され、配石遺構や4棟の住居跡が確認され、うち2棟は縄文時代後期前半に比定される敷石住居跡である（穂高町教委1972）。調査から縄文時代後期・晩期を中心に中期後半～晩期の土器等が出土しているが、この他に発掘調査時以外で縄文時代早期・前期や中期の土器が採集されている（穂高町誌編纂委員会1991）。特に中期の土器については、大量の採集資料を所蔵している個人もあり、発掘調査区以外の範囲に埋蔵されていたと考えられる。一方、他谷遺跡は川窪沢川を挟み、新林遺跡と隣接する遺跡である。平成11年（1999）に発掘調査が実施され、縄文時代中期中葉から中期後葉と後期中葉の住居跡45棟が確認されている（穂高町教委2001）。また、『長野県史』の時代区分で、縄文時代中期後葉Ⅳ期に比定される敷石住居跡6棟を含む中期後葉の住居跡が密集して確認されている。遺物については縄文時代中期後半の土器が多く出土しているが、後期初頭ではこれらは減少し、後期中葉に一定量の土器が出土している。これら、同時期の大きな集落がなぜ、この地域に密集しているのか、それぞれの集落はどのような関係にあったのか等の課題を、調査結果を蓄積し検討していく必要がある。



1 新林遺跡遠景（東から）



2 新林遺跡遠景（南西から）



3 調査区全景（北東から）



4 調査区全景（南東から）



5 調査前（南から）



6 A区表土除去中(北から)



7 A区検出状況（北から）



8 B区検出状況（南から）



9 SB1敷石 (南から)



10 SB1敷石 (南西から)



11 埋壺炉 (東から)



12 SD1 (北から)



13 A区全景 (北から)



14 B区全景 (南から)



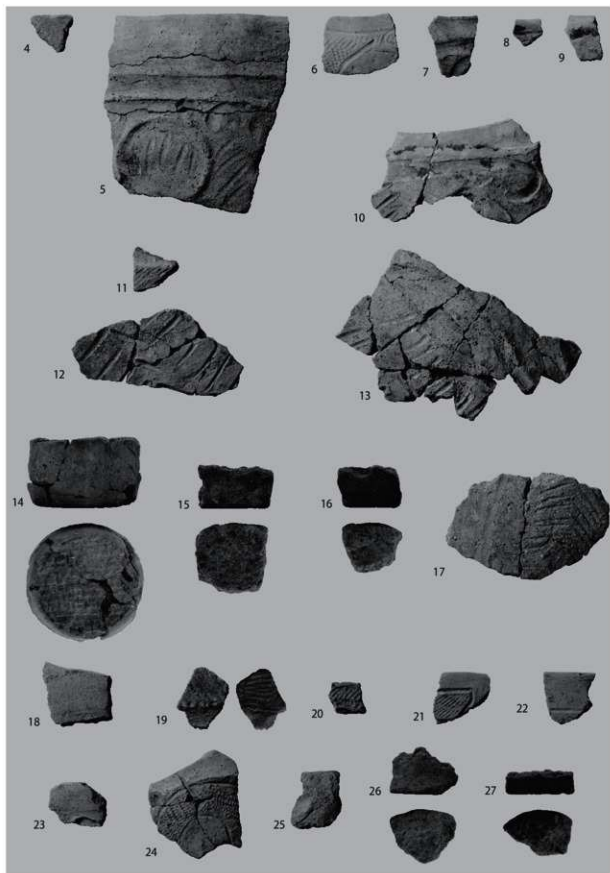
15 川窪沢川



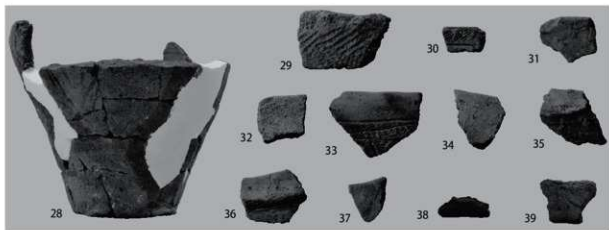
16 平成24年度工事立会採集土器



17 出土土器 1



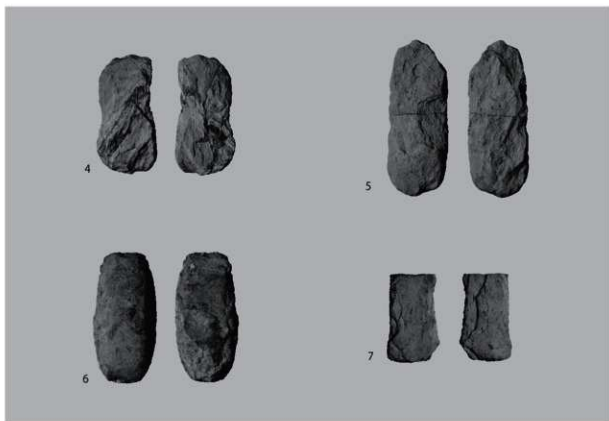
18 出土土器 2



19 出土土器 3



20 出土石器 1



21 出土石器 2

引用・参考文献（五十音順）

- 明科町教育委員会 1979 『長野県東筑摩郡明科町こや城遺跡発掘調査報告書』 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 1991 『はろく屋敷遺跡—川西地区県ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—』 明科町の埋蔵文化財第3集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 2000 『明科庵寺址—個人住宅建替に伴う緊急発掘調査報告書—』 明科町の埋蔵文化財第7集 明科町教育委員会
- 朝日村教育委員会 2003 『熊久保遺跡第10次発掘調査報告書—松本平西山山麓における縄文時代中期の集落址—』 朝日村文化財調査報告書第1集 朝日村教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2011 『平成21年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書—塩田若宮遺跡（第2次）—』 安曇野市の埋蔵文化財第4集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2016a 『平成26年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書—明科遺跡群古殿屋敷第2次発掘調査—』 安曇野市の埋蔵文化財第9集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2016b 『芝宮南遺跡—穂高南小学校プール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』 安曇野市の埋蔵文化財第10集 安曇野市教育委員会
- 島田哲男 2013 『中信地域における縄文時代中期の編年と動態』 『一般社団法人日本考古学協会2013年度長野大会研究発表資料集—文化の十字路 信州—』 pp.238-245 日本考古学協会2013年度長野大会実行委員会
- 長野県編 1988 『長野県史 考古資料編』 全1巻（4）遺構・遺物 長野県史刊行会
- 長野県埋蔵文化財センター 1993 『北村遺跡—中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11（明科町内）—』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14 長野県教育委員会
- 穂高町教育委員会 1972 『離山遺跡—長野県南安曇郡穂高町離山遺跡発掘調査報告書—』 穂高町教育委員会
- 穂高町教育委員会 1987 『矢原遺跡群（馬場街道遺跡）—県道矢原町～田沢停線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書—』 穂高町教育委員会
- 穂高町教育委員会 2001 『穂高町他谷遺跡—県営中山間総合整備事業あづみ野地区に伴う緊急発掘調査報告書—』 穂高町教育委員会
- 穂高町郷土資料館編 1987 『穂高町郷土資料館』 第9号 穂高町郷土資料館
- 穂高町誌編纂委員会編 1991 『穂高町誌』 第2巻（歴史編上・民俗編） 穂高町誌刊行会
- 三郷村教育委員会 1995 『東小倉遺跡』 三郷村の埋蔵文化財第2集 三郷村教育委員会
- 山形村教育委員会 2003 『三夜塚遺跡Ⅲ—農道環境整備事業（三夜塚地区）に伴う緊急発掘調査報告書—』 山形村遺跡発掘調査報告書第12集 山形村教育委員会
- 山形村教育委員会 2009 『下原遺跡 三夜塚遺跡Ⅳ—県営畑地帯総合整備事業竹田原地区に伴う緊急発掘調査報告書—』 山形村遺跡発掘調査報告書第15集 山形村教育委員会

調査報告書抄録

ふりがな	しんばやしせいせき3							
書名	新林遺跡3							
副書名	立体駐車場建設に伴う第3次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	安曇野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第13集							
編著者名	松田洋輔、土屋和章、横山幸子、浅川行雄、バリノ・サーヴェイ株式会社、山下泰永							
編集機関	安曇野市教育委員会							
所在地	〒399-8281 長野県安曇野市豊科6000番地 TEL0263-71-2000							
発行年月日	西暦2017年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
新林遺跡 (第3次)	長野県安曇野市 穂高町1856番1	20220	2-25	36° 19' 42"	137° 49' 60"	20150427 ～ 20150529	316㎡	立体 駐車場 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
新林遺跡	集落跡	縄文時代 中期後葉	敷石住居跡 溝状遺構 ピット	縄文土器、石器		縄文時代中期最終末の敷石住居跡が確認された。		
要約	<p>新林遺跡は、松本盆地の平坦部と西山山間部との接点にあたり、遺跡の北を東流する川窪沢川が造った扇状地のひとつで、段丘化した地形面に所在する。これまでに2次にわたる発掘調査が実施されており、縄文時代中期前半から中期最終末の集落跡が確認されていた。今回、立体駐車場建設に伴い発掘調査を実施したところ、縄文時代中期最終末の敷石住居跡を確認し、埋蔵が、敷石下から埋設土器が出土した。調査区内での遺構密度は低かったが、遺跡内での遺構分布を検討するために重要な調査成果となった。調査範囲は遺跡のごく一部であるが、今回までの調査成果から新林遺跡の遺構分布は、遺跡内東側で、縄文時代中期後半の遺構が高い密度で存在し、中央付近の遺構空白地帯を挟んで遺跡内西側で、縄文時代中期最終末の遺構が密度低く存在すると考えられる。</p>							

安曇野市の埋蔵文化財第13集

新林遺跡3

立体駐車場建設に伴う第3次発掘調査報告書

発行 平成29年(2017)3月31日
安曇野市教育委員会
〒399-8281 長野県安曇野市豊科6000番地
電話0263-71-2000

編集 安曇野市教育委員会
印刷 電算印刷株式会社

